科目区分，授業科目名　教員養成課程・国際理解教育コース
日本芸能史
（２年生対象　受講者数　４０名）

教育学部講義に於ける視聴覚機器環境

国語　福田安典

【問題の所在】
日本芸能史の講義は講義の内容上、視聴覚機器を用いる。芸能というのは、本来は劇場で上演され、それを鑑賞することが必要不可欠であるが、愛媛という地域性を考慮すれば、ビデオなどが必要である。
ところが、果たして、愛媛大学教育学部で日本芸能史に割り当てられる講義室は、ビデオ上映に相応しい環境を有しているのであろうか。
この点について学生にアンケートを実施した。

【アンケート結果】
本年度に日本芸能史に割り振られた教室は２号館４階のＬＬ教室である。アンケートに協力してくれた学生は３７名。
このうち、今の環境で多少の問題はあるにしても支障はないと答えた学生は２７名、改善を求める声は１０名であった。ただし、自由記述によるアンケートであるため、実際には混在した解答も見られるのでこの数値に厳格な意味はない。おおまかな傾向の把握である。多少の不満点を入れれば、ほとんどの学生がなんらかの要求を書いている。

【改善を求める声】
改善を求める声としては、

○大画面のスクリーンだけでなく、手元にモニターが欲しい。
○もっと大画面で見たい。
○音響が悪い。
○前の席なら問題はないが、後ろの席なら映像が見にくく、また、人の頭が邪魔になる。
○もう少し設備を整えて欲しい。
○ＬＬ教室は狭くて窮屈である。
○せっかく興味や関心がわく内容の映像であるので、それを最大限に活かす教室で受講したかった。
○本格的な設備が欲しい。
○もっと綺麗な所で受講したい。
○これ以上大きな教室であれば無理。この教室ぐらいが限界。
○映像を見るときに暗くなるので、ノートが取りにくい。手元にライトがあれば良かった。
○もす少し臨場感の出る設備が欲しい。

というものであった。

【考察　その１】
上記の学生の改善点を総括すれば、

①今より大画面の正面スクリーン
②手元のモニター設備
③音響の充実
④手元にメモ書き取りようの小ライトの設備
⑤階段教室
⑥広さ、綺麗さ

といったものを学生が求めていると考えられる。

【映像について】
上記の学生の要求に対して、大学側の用意すべき解答は二つである。一つは、学生の望む設備を充実させること、もう一つは映像を使用しない講義を構築することである。
アンケートには、当該講義における映像の必要の有無についても学生から次のような意見があった。

○普段あまり見ることのない映像をたくさ

ん見れて勉強になった。
○映像を見ることによってとてもわかりやすかった。
○映像を使ったこの授業は効果的であった。実際の動きを見ないことには、日本芸能を理解できないから。
○実際に見に行くより、解説を聞きながら見られるのは利点だ。
○講義だけよりは、メデイアがあったほうがよい。
○映像を見ることができたから、興味が持てた。
○映像があったほうが雰囲気がわかるし、記憶にも残る。

【考察　その２】

上記のアンケートによれば、大半の学生が映像の必要性を認めている。

とすれば、大学側の改善点としては、上記「考察　その２」で示したような設備の充実に力を注ぐべきであろう。

歴史的に言えば、教育学部の設備は、数年前よりは改善されている。それに一応の評価を下したいが、ただ留意すべき点は学生が入れ替わっていることである。以前の粗末な設備を知る学生は、もはや卒業している。今回の受講生は、今の設備を以前と比較することなく判断しているのである。ただ「設備は以前よりはよくなった」というだけの説明には、説得力をもたないであろう。

また、他学部の状況はいかなるものであろうか。寡聞にして他学部の設備についての情報はない。ゆえに、以下は憶測半分の分析である。

もし、他学部の設備が教育学部より充実しており、しかも今も充実の方向性が認められるなら、設備改善の要求を求めなければならない。同じ愛媛大学にあって、同額の授業料を払う学生の間で、あまりにも格差のある設備環境は問題であろうと思われる。

【まとめ】

本講義は、国語科の講義として、日本の芸能史を学び、特徴あるジャンルの鑑賞方法を学ぶものである。また、日本語教師養成プログラムにも関わる科目である。

その目的及び到達点はシラバスに明示しているが、その到達に至るには、環境整備が必要であろう。